

South Wind

港区国際交流協会
Minato International Association

目次・Contents・目录

「サウス・ウィンド」編集スタッフ：川嶋ロイス「バンビ」	2
South Wind Editorial Staff: Lois "Bambi" Kawashima	2
《南风》的编辑人员：川岛路易丝“斑比”	2
思わぬ恥の経験談～「トリニダード・トバゴのカリプソ魂」－「うっかり居眠りで気付いたカリプソ魂」	3
“Calypso Soul of the people of Trinidad & Tobago” - Discovering Calypso Soul by inadvertently dozing off -	3
也谈预料不到的害羞事～「特立尼达和多巴哥的即兴歌之魂」 （不知不觉打起瞌睡时发觉地）	4
バンコク四方八方（18）微笑の国タイから～思わぬ恥の経験～日本・驚き・テクノロジー	5
All Directions of Bangkok (18) From Thailand - A Pleasant Country Unexpected Disgrace - Japan, Surprise, Technology	6
曼谷的四面八方（18）来自微笑的国度 — 泰国 意外的“难为情”体验～日本・惊异・技术～	7
思わぬ恥の経験談 「日本製オペラ」	8
Operas made in Japan	8
出乎意料的羞耻经验谈「日本制歌剧」	9
ステイーヴンス・はるみのアメリカ便り（38）思わぬ恥の経験～カリブ海思い出談義	9
A letter from the U.S.A. (38) Caribbean Experience	11
美国来信（38）加勒比海的回忆	12
青少年国際理解講座 西町インターナショナル・スクール ウィンターコンサート見学会 憧れの地へ（少し大げさですが・・・）	13
MIA Youth International Understanding Series—Winter Concert at Nishimachi International School (NIS) A visit to the place I longed for (a slight exaggeration?)	13
青少年国際理解講座～记西町国际学校「冬季音乐会」 不可思议的地方（小小的夸张一点）	14
港区国際交流協会活動紹介～ウォーキング2003年	15
Presentation of One of MIA's Activities: "Walking Tour"	16
港区国際交流協会活動的介绍 — 散歩道	16
編集後記	17
Post-script	17
编辑后记	17

▪ サウス・ウィンド編集スタッフ紹介 ▪ South Wind Editorial Staff ▪
▪ 「南风」编辑人员之介绍 ▪

「サウス・ウィンド」編集スタッフ：川嶋ロイス「バンビ」

「バンビ」は鹿の中でも非常に珍しい種類です：生まれも育ちもニューヨーク市です。

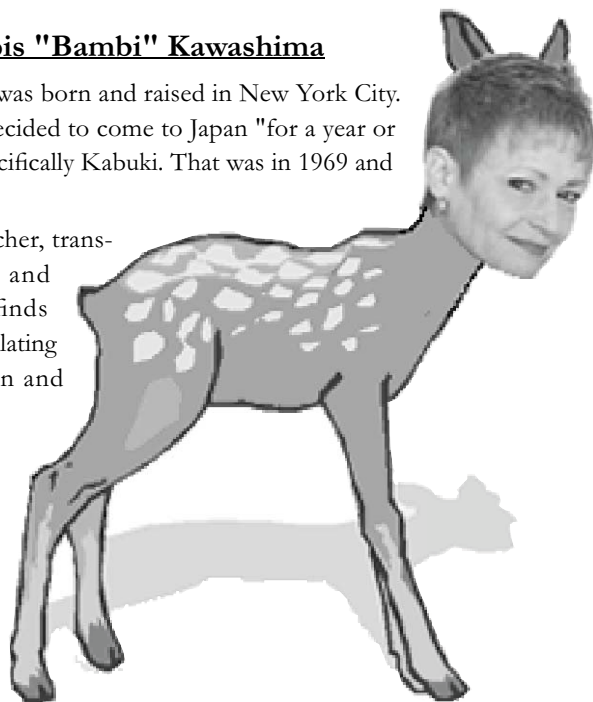
演劇芸術で M.A. を取得後、日本の伝統演劇（特に歌舞伎）の研究を進めるために「1 年間くらい」のつもりで日本に来ました。それは 1969 年のことでしたが、バンビはいまだに日本にいます。

教師、翻訳者、編集者、コピーライター、電子出版者として、この国の「英語原生林」の中を駆け回っています。バンビにとって、文化交流とボランティア活動はとても刺激的でやりがいのあることなので、MIA に入会しました。MIA の翻訳と広報委員会を手伝っています。

South Wind Editorial Staff: Lois "Bambi" Kawashima

"Bambi" is a very rare species of deer: she was born and raised in New York City. After receiving her M.A. in Theater Arts, she decided to come to Japan "for a year or so" to further her study of Japanese theater, specifically Kabuki. That was in 1969 and she is still here.

Working in the wild English Forest as a teacher, translator, editor, copywriter, desktop publisher and photographer, she joined MIA because she finds cultural exchange and volunteer work very stimulating and rewarding, and serves on the Translation and Public Relations Committees.



《南风》的编辑人员：川岛路易丝“斑比”

“斑比”是一种很少见的鹿——生长在纽约市。

1969 年，“斑比”在取得表演艺术的 M.A. 之后，为进行日本传统戏剧（特别是歌舞伎）的研究来到日本。原定计划要停留“一年左右”，然而，至今她仍然留在日本。

作为教师、翻译、编辑、广告词撰稿人、电子出版者，“斑比”驰骋在这个国家的“英语原生林”中。对于她来说，文化交流和公益活动是极具意义和刺激性的事，因此加入了 MIA，协助 MIA 的翻译和宣传委员会的工作。

[翻译：栗文霖]

译注：“斑比”——迪斯尼第五部经典动画片“小鹿斑比”（根据 Felix Salten【奥】的原著改编）中的主人公。

思わぬ恥の経験談～「トリニダード・トバゴのカリプソ魂」
－「うっかり居眠りで気付いたカリプソ魂」

佐々木 裕子 (日本)

1999年、夫婦して失業（同会社勤務だったので）した私たちだったのですが、「こんなチャンス一生に二度とないかもしれない」と思い、カリブ海の島国、トリニダード・トバゴへの旅行を決定しました。

一番の目的はカーニバル期間中に開催されるパン（スティール・ドラム）を100人以上で演奏し、その演奏で順位を競う“パノラマ・コンペティション”を見ることでした。しかし現地に着いていろいろと情報を得るうちにカーニバル期間中にはさらにさまざまな音楽のイベントが開催されることを知りました。全部体験していこうと張り切って出かける私に、半ばひっぱられていった夫はそれらのイベントの多くが夜中にかけ行われるものだったこともあって日々疲れがたまっていた様でした。

そのイベントの中でもメインともいえるディマンシュ・グラというものはトリニダード・トバゴを代表するもうひとつの音楽、カリプソにおいてその年の一番の歌い手を決定するカリプソ・モナークが行われるものでした。ディマンシュ・グラも他のイベント同様夕方から始まり、さまざまなショーを盛り込みつつ、メインのカリプソ・モナークが行われるのは夜中に差しかかるころ。夫はゆっくりと腰掛けられる椅子があったこともあり、頭をうなだれて居眠りをはじめてしまったのです。その時、私たち

から3～4席あいた辺りに座っていた年の頃17～18才頃のかわいい女の子が私たちにむかって大声で怒鳴ってきたのです。怒鳴るというより大声の演説のようなその言い分はおおまかにいうと「ちょっとあなた！居眠りなんかしないでちゃんと聞きなさい！今歌っているカリプソ・シンガーはとてもいいシンガーで、歌っている内容はとても素晴らしいものなんだから」とのことでした。まさか海外で、しかもこんなかわいらしい女の子からお叱りを受けるとは思ってもみなかった夫は、それだけでしっかりと目がさめたようで「ok, ok」などと言いながら背筋を伸ばしたりして真剣に聞いていることをアピールしていました。

後になって知ったことですが、トリニダード・トバゴの人びとにとってカリプソというものはただ音楽として楽しむものではなく、その歌詞の内容（男女間の尽きない問題から社会批判まで）がうまく表現されているか、そのあたりもじっくり味わうものらしいのです。そういえば聞いていた人々、もちろんその可愛い女の子も含めて皆歌詞のところどころで大笑いしたり、うなずいたり、拍手をしていたりという動作が見られました。トリニダード・トバゴという国全体の人びとの根底にある社会や人間関係への関心の強さを実感した一つの出来事でした。

“Calypso Soul of the people of Trinidad & Tobago”
- Discovering Calypso Soul by inadvertently dozing off -

Yuko SASAKI (Japan)

In 1999, my husband and I lost our jobs at the same time, since our company went out of business. But we took this opportunity as the chance of a lifetime, and decided to visit Trinidad & Tobago, an island nation in the Caribbean.

The primary purpose of our visit was to see the Panorama Competition, which is held during Carnival; each Pan (steel drum) group is made up of more than 100 performers. However, after we arrived there, we learned that there were many more musical events going on. I was so excited about attending as many events as possible, and my husband was trying to follow me, but most of the events were held through the night and he got more tired day by day.

At Dimanche Gras, one of the principal events during the Carnival, there was a Calypso Monarch, where the best singer of the year would be selected. As you know, Calypso is a representative form of music of Trinidad & Tobago. Like the other events, Dimanche Gras started in the evening and by the time Calypso Monarch began after various other attractive shows, it was already midnight. The seats were very comfortable and my husband was swaying back and forth and started to doze. Then a pretty girl of 17 or 18

began to shout at him from three or four seats away. It was more like a speech in a loud voice than an angry shout, and I remember her saying something like this: “Hey, you! Don’t doze off - just listen! The Calypso singer on stage now is a very good singer and the lyrics of the song are wonderful.” My husband didn’t expect to be scolded by a pretty young girl like that abroad; he woke up and said, “OK, OK.” to her. After that, he pulled himself up and tried to let her know that he was listening seriously.

We learned later that for the people of Trinidad & Tobago, Calypso is not just music to enjoy listening to; they also appreciate how well the lyrics of the songs are performed. (The lyrics contain love affairs of men and women as well as social criticism.) And I remembered that, during the show, I had seen people (including that pretty girl) bursting out in laughter every now and then, and sometimes nodding their heads or clapping their hands at some parts of the lyrics. From this, we realized that the people of Trinidad & Tobago are strongly interested in society and human relationships.

[Translated by: Atsuko NONOGAKI]

也谈预料不到的害羞事～「特立尼达和多巴哥的即兴歌之魂」
（不知不觉打起瞌睡时发觉地）

佐佐木 裕子（日本）

想到「这种机会或许今生再也没有了」于是本在同
一公司工作又同时失业了的我们夫妇俩便在1999
年决定来到加勒比海的岛国特立尼加和多巴哥旅行。

来这儿最主要的目的是观看感恩节期间所举办的
由100多人以上参加演奏并从中角逐出名次的钢管
鼓角逐赛的。但是到了那儿得到各种信息后才得知这
期间有各种名目的音乐活动，一边是想全部一个不漏
地去参加并体验地我，而另一边则是硬被拉着去出席
这些多半是在夜晚举行的活动而日显疲劳的丈夫。

在这些活动中最重要的是有一种可以说是代表这个
国家音乐的被叫做理解领悟动感的東西，并且在即兴
歌王赛中决出这一年度的最佳歌手。与此同时其它的
音乐活动也夹杂着各种晚会同时在傍晚时开始。等到
主要节目的即兴歌王赛时也快接近半夜了，我丈夫便
徐徐地落坐并把头倒向一边慢慢地打起瞌睡。就在此
时隔开我们座位3～4个位子的一位17～18岁左

右的相貌可爱的女孩子冲着我们大声吆喝起来，与其
说是冲着我们吆喝不如说是用像在演讲似的大嗓门提
醒我们「你！竟然还敢打瞌睡！今天在唱的即兴歌手
是个好歌手喝的内容很精采。」我丈夫也没想到竟然
在国外，并且是被那么可爱的女孩子指责，瞌睡虫也
似手被吓跑似地，不停地说「好！好！」地伸直背做
出在听的样子。

后来才知道在特立尼达和多巴哥这个国家里即兴
歌不单是做为音乐被欣赏，其歌词里所表达的内容「男
女间错综复杂的关系及对社会的批判」是否准确，只
有细听才能体会得到。这样想来在听众里，当然也包
括那位可爱的女孩子，大家在听到关键处或捧腹大笑
或点头赞许或拍手称快，表现出种种姿态。在这个国
家里我们深深地感受到人们对社会及对人与人之间关
系的强烈关心之情。

〔翻译：王晓菁〕



英語で異文化再発見／“Let's Rediscover Japan”

港区国際交流協会では、英語による「異文化再発見」の会を毎月原則第二または第三土曜日に開いて
います。

日本について、知っていると思っていでも、まだ見落としていることがあるかもしれません。また、海外
のことを知ることで、日本のことを知ることもあるかもしれません。

このプログラムでは、毎回、スピーカーが一つ的话题を提供します。スピーカーのお話を聞くだけで
なく、参加者同士のフリーディスカッションの時間もあります。

興味をお持ちの方、ぜひ一度ご参加ください。新しい発見があるかもしれません。

日にち： 5月15日（土）、6月19日（土）、7月10日（土）午後1時30分～3時30分

場 所： 三田 NN ホール スペース D（港区芝 4-1-23）

This program for rediscovering Japan is conducted in English. Meetings are held monthly on the second or third Sat-
urday. Can you fully and confidently express yourself when discussing Japan and your own country? There may be some
things you have overlooked or features which you will want to reexamine after hearing someone else's ideas. Meetings
include time for free discussion among participants. Everyone is welcome!

Date: Saturdays, May 15, June 19 and July 10

Time: From 1:30 p.m. to 3:30 p.m.

Place: Mita NN Hall, Space D, 4-1-23 Shiba, Minato-ku, Tokyo

バンコク四方八方 (18) 微笑の国タイから ～思わぬ恥の経験～日本・驚き・テクノロジー

岩船 雅美 (日本)

【2004 年 1 月 12 日記】

昨年(2003)の7月、大阪に出張した。ほぼ一年ぶりの祖国訪問であったが、あまりの変化に驚いた。例えば、携帯電話の進歩が凄い。うつむいている人が多いな～、と思いながらよく見ると、携帯電話を見ているじゃないですか。『すみません』と思いつつ覗き込むと、携帯電話にその日のニュースが流れている。携帯で、メールのやりとりやインターネットへのアクセスができる、と聞いてはいたが、実際に見ると、やはり驚く。

更に、繁華街のネオンや音響の物凄いことといったら。街角には巨大なスクリーンがあって、大音響とともに新商品のコマーシャルを流していて、必ず目に耳に入るようになっている。この刺激の大きさは、アジア有数の大都会、バンコクであっても比較にならない。日本の大都市では、24 時間情報にアクセスできる、というよりも、アクセスを半ば強制されているわけで、これはたいへんな情報社会になったものだ、と実感した次第。

さて出張するときは、メールをチェックできるように小型のノート PC を持っていく。タイでは ADSL や無線アクセス、ましてや光ファイバーはまだ普及していない。通常の固定電話回線からインターネットにアクセスするのであり、当然僕の PC もそうになっている。

ところで日本である。固定電話そのものが激減していた。ホテルなら、公衆電話を使ってアクセスできる(部屋の電話からのアクセスもできるのだそうだが、何やら面倒でうまくいかなかった)。ところが、出先にいると、できないのである。ある事務所を訪ねたときに

「メールチェックしたいので電話回線を貸してください」

とお願いしたら、事務所中の PC は全てネットワークが組まれていてインターネットへのアクセスがどういう仕組みになっているのか、そして電話回線がどうなっているのか、事務所の方もわからない、と言っていた。だから断念。知り合いのお宅を訪ね

たときも、インターネットは ADSL でアクセスしているそうで、その仕組みがわからず、電話回線をお借りすることを断念。

PC を抱えて、固定電話回線を求めて(即ち、一昔前の方式を求めて)、あちらこちらとさ迷うのは、なかなかに恥ずかしいものであった。それにしても、日本の技術文明は進歩が速くて、いつか任期を終えて日本に戻ったときにカルチャーショックにあいそうだ。

さてタイの地方部に出張するときも、必ず小型の PC を持っていく。固定電話回線は簡単に見つかるから、インターネットへのアクセスもまた簡単である。しかし、のんびりとしたタイの農村の中で、ノート PC 相手に、机にかじりついて、急用のメールのやりとりをしていて、

「フネサン、忙しいネ～」

などと、村の住民に驚かれるのもまた、一種の恥ずかしさを覚える。

つい先日、インターネット化社会を皮肉った、雑誌の特集にこうあった。

「24 時間、地球上がオフィスになって楽しいですか？」

…インターネットが普及しだした頃は、「いつでもどこでも」情報のやりとりができる、ということにたいそう興奮したものだったが、実際にそうになってしまい、興奮が薄れた今、これほど不自由なことではない、と思う。技術の進歩についていけないことも恥ずかしいことではある。しかし、どこにしようとも、その技術がもたらした社会のペースに合わせて生きていかなければならないのも恥ずかしい。

他人とのコミュニケーションに割く時間がずいぶん増えて、自分のプライバシーがだんだん無くなっていくようだ。つまり、自分が裸に近づいていくわけで、これは恥ずかしさの原点であろう…(と言いながらも、この原稿もメールで送信しているのです)。



All Directions of Bangkok (18) From Thailand - A Pleasant Country **Unexpected Disgrace - Japan, Surprise, Technology**

Masami IWAFUNE (Japan)

[January 12, 2004]

I made a business trip to Osaka last July. I was astonished by the huge changes in my home country after an interval of one year. Let me give an example: the progress of mobile phones. I was wondering why many people were looking down, and had a close look. What did I find? They were looking at their cell phones. I took a peep, apologizing in my heart, and knew there was news going across the screen. I'd heard that you can exchange e-mails and get access to the Internet, but a picture is worth a thousand words.

To make matters worse, all the bustling streets are full of neon signs and ear-shattering sounds. There is a huge screen at every corner with ads for new products. No one can dodge these flamboyant colors and deafening sounds. The excitement of life in this city is unique, even compared with that of Bangkok, which is also one of Asia's great cities. You can, or are forced to, access information around the clock, which made me feel that something was really happening.

I carry my small computer all the time to check e-mail. Neither ADSL nor wireless access, let alone optical fiber, is popular yet in Thailand. People get access to the Internet through regular telephone lines and, as a matter of course my computer is so set up.

Now, in Japan, the number of fixed telephone lines has dropped sharply. You can use a public phone in a hotel - I somehow failed to connect my PC using the room phone. All complicated! I don't know what to do when I'm away from the hotel. I visited an office the other day and asked for a telephone line. They didn't know what to do either. All the computers in the office are connected by a LAN system and no one could do anything about it. I gave up. I dropped

in at my friend's place and asked the same thing. They connect to the Internet using ADSL and nothing could be done. I gave up again!

It was quite embarrassing to hang around with a PC under my arm looking for a fixed telephone line, which seems out-of-date now. Technology in Japan is making remarkable progress and I may suffer a reverse culture shock when I'm through with the mission and come back here.

When I make business trips to rural areas in Thailand, I don't have any trouble finding telephone lines and getting access to the Internet. I carry my PC all the time, and it works quite well. However I feel another type of embarrassment when the village folks see me at work with my PC in the free-and-easy Thai environment and say, "You look very busy, Fune-san."

I read a feature article in a magazine making cynical remarks about the Internet society. It said, "Are you really happy when you make the whole earth your office?" We were very excited to be able to give and take information anytime and anywhere when the Internet came into wide use. Now that it's all realized and the excitement's cooled down, I'm afraid I feel less free than before. It's a shame not being able to keep up with technological development, and it's another shame being always at technological society's beck and call, I think.

We are busy exchanging information with others, and our own privacy seems more and more invaded. In other words, we are getting closer to be naked. That may be the main reason for this shame. (So saying, I'm sending this essay via e-mail.)

[Translated by: Mitsuko KAWASHIMA]



曼谷的四面八方（18）来自微笑的国度——泰国 意外的“难为情”体验 ～日本・惊异・技术～

岩船雅美（日）

[2004年1月12日]

去年7月，我去大阪出差。时隔一年重返祖国，变化之大令我感到惊诧。比如，手机的进步突飞猛进。我看到街上有许多人低着头，仔细一看原来都在看自己的手机。（带着抱歉的心情）凑过去一看，手机上传送的是当天的新闻。我听说过用手机可以发送邮件和上网，但亲眼目睹依然使我感到惊讶。

而且，繁华地段的霓虹灯和音响也令人瞠目。街角的巨大屏幕，伴随着震天的音响播放着新商品广告，使你不得不听，不得不看。这种巨大的刺激，即使是亚洲屈指可数的大都市曼谷也无法比拟。在日本的大都市，24小时随时可以接触到信息，实际上是一种半强制性的灌输，这使我感到进入了一个令人困惑的庞大的信息社会。

我出差的时候，都带着小型笔记本电脑以便发送电子邮件。在泰国，ADSL、无线联网和光缆尚未普及，一般都是通过固定电话线上网，我的电脑也是如此。

但这是在日本，固定电话急速减少，在宾馆可以通过公用电话上网（据说也可以通过客房的电话联网，但比较麻烦，没有成功），可是出去访问时就不能用这种方法了。我访问某个事务所时，为收发电子邮件，向他们借电话线，可是他们说，办公室里所有的电脑都是内部联网的，他们也不知道网络系统和电话线路的详细情况，我只得放弃了。去朋友家的时候，也因

为朋友用ADSL上网，不明白系统结构，而放弃了借用电话线的想法。

抱着电脑，四处去找固定电话线（寻求前一个时代的方法），真是一件很难为情的事。但日本的技术文明进步得实在太快，等我任期结束回到日本时，也许会受到“文化冲击”。

我在泰国去乡下出差时，也都带上小型电脑。在泰国可以很容易地找到固定电话线，上网也十分简单。但是，在安闲的泰国农村，村民们看到我在桌前收发紧急邮件，会惊讶地说：“舟先生，你可真忙啊”，这也会使我感到难为情。

日前，在一份讽刺互联网社会的杂志专集中，有这样的描写——“全天24小时都是办公室的地球，你认为快乐吗？”……互联网开始普及时，“无论何时何地”都能联网这一点使人们兴奋不已，但一经实现，兴奋逐渐消失，反而感到没有比这再拘束人的了。跟不上技术的进步让人感到难为情，但无论在哪里都不得不应和技术带来的社会节奏而生存，这也会成为一种难为情。

与他人进行交流的时间大幅度增加，而属于自己的时间逐渐减少，也就是说人们自身逐渐趋向裸体，这是人感到难为情的根本原因吧。（话是这样说，我这篇文章也是用电子邮件发出的）

[翻译：栗文霖]

日本語で話す会 / “Let's Chat in Japanese”

港区国際交流協会では、日本語を勉強していても実際に話す機会がない外国人の方、新しく友だちをつくりたい、話題に興味をお持ちの外国人の方を対象に「日本語で話す会」を毎月1回、土曜日に開いています。中級レベルでは身近な話題を中心に、上級レベルでは時事問題を中心にお話を進めます。LCJボランティアスタッフがお待ちしております。ぜひ一度、ご参加ください。

日にち： 5月15日（土）、6月19日（土）、7月10日（土）午前11時～午後12時30分

場所： 三田NNホール スペースD（港区芝4-1-23）

If you do not have any opportunity to speak it out in spite of studying Japanese, or if you want to make friends, and have an interest in discussion/exchange of opinions, you are welcome to join our LCJ, “Let's Chat in Japanese,” meeting. We have intermediate and advanced levels. Let's have great fun chatting in Japanese!! Feel free to join us.

Date: Saturdays, May 15, June 19 and July 10

Time: From 11:00 a.m. to 12:30 p.m.

Place: Mita NN Hall, Space D, 4-1-23 Shiba, Minato-ku, Tokyo

思わぬ恥の経験談 「日本製オペラ」

清澤 暢人 (日本)

20年ほど前ウィーンに出張した。目的はここに本部のある国際原子力機関 (IAEA) での核査察に関する専門家会議に出席するためであった。会議が終わった日の夜、私はこの会議のコーディネータでIAEAの事務局員のHansを夕食に誘った。夕食の話題は、最初はおっぱら世界の原子力開発のことで、ここで私は日本製の原子力発電が如何に性能が良く故障が少ないかをおおいに自慢し、その間オーストリア人の彼はもっぱら聞き役であった。しかし少し経ってから彼が唐突に聞いてきた。

「ところで、日本にもオペラはあるの? そう、日本製のオペラが。」突然の質問に私は狼狽した。「えーと、確か團伊久磨が作った「夕鶴」というのが有名だが。」「夕鶴? 聞いたことがないな。ヨーロッパの何処かのオペラ座で演奏されたことがあるの?」彼は皮肉たっぷりに聞き返してきた。「さあ、どうかな?」。この後、彼は堰を切ったようにオペラについて語り始めた。モーツアルトオペラのすば

らしさや、オペラとオペレッタの違い、今秋のウィーンオペラ座講演は期待できる等を熱心に話してくれた。今度は私が聞き役に廻る番であった。でも私は本当はこう反論したかった。「確かに世界的に知られたオペラは少ないかもしれないが、日本には歌舞伎や文楽あるいは能といったヨーロッパのオペラやシェークスピア演劇に負けない素晴らしい伝統舞台芸術がある」と。しかしこれら日本の伝統文化を説明するには、これらに対する私の知識があまりにも乏しかった。こんな状況において自国の伝統文化をきちんと説明できない自分が実に恥ずかしかった。

よし、帰国したらおおいに勉強し、今度は日本の伝統文化の語り部としてヨーロッパにやってくるぞ。私はそう決心した。

しかし、残念ながら私の日本の伝統芸術についての勉強は現在に至るまで遅々として進まず、これらの語り部としてヨーロッパにわたるという夢も実現していない。

Operas made in Japan

Nobuhito KIYOSAWA (Japan)

I visited Vienna about 20 years ago on business. The purpose of the visit was to attend an experts' meeting regarding nuclear safeguards, which was held at the International Atomic Energy Agency (IAEA) headquarters in Vienna. On the night the meeting ended, I invited Hans, the coordinator of the meeting and a member of the IAEA office, to dinner. At first, the topic at dinner was the development of nuclear power in the world. I boasted about how nuclear power plants made in Japan achieved high performance and had a very low failure rate. While I spoke, Hans, who is native Austrian, completely took the part of the listener. But, after a while, he suddenly asked me, "By the way, is there any opera in Japan? Yes, I mean operas made in Japan." I was flustered and replied with hesitation. "Well, hmm.... Yuuzuru (Crane at Dusk) composed by DAN Ikuma is famous in Japan." "Yuuzuru? I have never heard it. Has it ever been played at an opera house in Europe?" he asked me sarcastically. "I don't know." Then, he started talking eloquently about opera. He told me with enthusiasm how fascinating Mozart's operas are, what the

difference between opera and operetta is, how wonderful the coming autumn season program of the Vienna Opera House would be, etc. This time, it was my turn to take the part of listener. To tell the truth, however, I wanted to reply to him that, even though there may be a limited number of world-renowned operas in Japan, we have wonderful traditional theatrical arts, such as Kabuki, Bunraku and Noh, that are on a par with European opera and Shakespeare. But my knowledge about these traditional arts was too poor to explain them to him in detail. I was ashamed of myself because I was not able to properly explain my country's traditional culture in such situation.

Well, I decided that, when I returned Japan, I would learn about Japanese culture and acquire sufficient experience, then go back to Europe as a missionary for Japanese traditional arts. I made up my mind to do that, but, I regret to say that my study of traditional culture still shows very slow progress, and my dream that go to Europe as a missionary of Japanese traditional arts has not been realized yet.

出乎意料的羞耻经验谈「日本制歌剧」

清泽 畅人（日本）

大约 20 年前我到维也纳出差，目的是出席一个在总部设于此地的国际原子能机构（IAEA）召开的有关核武器核查的专家会议。会议结束的当天晚上，我邀请此次会议的协调员－IAEA 事务局的 Hans 先生共进晚餐。晚餐时的话题，起初只是涉及有关世界原子能开发之事，中途，我开始大肆炫耀日本制的原子能发电性能如何优越、故障如何少，出身奥地利的他在我说话期间只是一直听着。可是，过了一会儿，他很贸然地问我一句。

“请教一下，日本也有歌剧吗？我是说，日本制的歌剧？”面对突如其来的提问，我显得很狼狈。“嗯，团伊久磨创作的《夕鹤》确实是，好像很有名”。“夕鹤？没听说过。在欧洲的哪个歌剧院上演过吗？”他充满嘲讽地反问我。“呀，这个吗，我……”。之后，他像决了堤的洪水一样开始谈起歌剧。非常热心地告诉我，就像莫扎特歌剧如何完美，歌剧和轻歌剧的区

别，今年秋天将在维也纳歌剧院举行的演讲肯定不错等，滔滔不绝。这次，轮到我做听众了。不过，我真的想如此反驳他。“闻名世界的日本歌剧可能确实比较少，但是，日本有「歌舞伎」、「文乐」或是「能」等丝毫不比欧洲的歌剧或是莎士比亚戏剧逊色的优秀传统舞台艺术”。然而，要想说清楚这些日本的传统艺术文化，对于我这样一个缺乏这些传统文化知识的人来说，真是太难了。在这种情况下，我连自己国家的传统文化都无法恰如其分地加以解释，实在是羞愧不已。

好，我暗暗地下了决心，回国以后，一定要拼命学习，下次我要以一个日本传统文化传播员的身份再访欧洲。

但是，遗憾的是，我对于日本传统艺术的学习至今没有任何进展，横跨欧洲，传播日本传统文化的梦想也没有实现。

[翻译：蔡海东]

スティーヴンス・はるみのアメリカ便り (38) 思わぬ恥の経験～カリブ海思い出談義

スティーヴンス・はるみ

【2004 年 1 月 17 日記】

21 年以上前、東京で今の主人と結婚するまで、私は日本の国外で暮らした経験などまったくありませんでした。その当時、主人はアメリカ合衆国、国務省の外交部の仕事で東京のアメリカ大使館に勤務していました。結婚をして間もなく私たちは、国務省から、南米にあるガイアナという国に 2 年間赴くことになることと知らされました。その時は外国で生活するという事にわくわくした私でしたが、一体どんな事が待ち受けているのか想像もつかないでいました。何よりもまず、ガイアナという名前の国などそれまで私は聞いた事もなかったのですから。

ガイアナは、南米の北岸に位置する小さな国で、その国境をヴェネズエラ、スリナム、ブラジルと分かち合っています。ガイアナは元々はオランダの植民地だったのですが、18 世紀の初めに英国の支配下に置かれるようになった国です。英国領ギアナとなったこの国はその後、1966 年に独立を果たし、その名前をガイアナと変えました。地理的には南米に属する国なのですが、文化的には西インド諸島の小さい島々と共通する点の方が多く、ガイアナの人びと自身、自分たちはカリブの人間であると主張しています。

ガイアナの海岸線には堤防が張り巡らされ、海の色もターコイズ・ブルーではありません。そのた

め、ジャマイカやバルバドス島等、カリブ海の有名観光スポットになっている他の島などとは違い、観光業者の手がまったくと言ってよいほど入っていません。この国の主な産業はその昔からずっと砂糖きびの栽培でした。ガイアナにはまた、ボーキサイト、マンガン、金、ダイヤモンド等の自然資源も存在します。そのような豊かな資源があるにも関わらず、この国は『貧しい国』と言われていています。このような情報は国務省から私たちに提供されましたが、私たちはさらにその国の文化、風習などについてもできるだけ資料を集めて読み漁りました。外国で傲慢なアメリカ人として見られることだけは避けたいと思ったのです。それでも、この真のカリブ海文化を持つ国ガイアナでの私たちの体験は資料を読んだだけで予想がつく種類のものではありませんでした。

この国は確かに経済的には貧しいかもしれませんが、その文化はとても豊かなものがあります。そして、豊富なトロピカル・フルーツ、魚介類に恵まれた私たちのガイアナでの生活はまるで天国のようでした。テレビ局のないガイアナでは、その分人びとは自分たちの伝統や文化に目を向けています。カリブの伝統的な音楽であるカリプソを人びとは最も好み、彼らの育てる砂糖きびからは世界一のラム酒

(次頁続く)

スティーヴンス・はるみのアメリカ便り (続き)

が造られています。バーベキュー・パーティー、カクテル・パーティー、ディナー・パーティー等、人びとが集まる社交の場では当然のようにカリプソとガイアナ産のラム酒が求められます。2年間、ガイアナで暮らす間に、私たちはカリブの人びとが如何にパーティーを楽しむかを学んだのでした。

ガイアナの文化風習を知ること努力し、それを尊重しようとする態度が認められたのか、地元の人びとと私たちは比較的早く親睦を深めてゆきました。ガイアナの首都であるジョージタウンの町に落ちていて間もないうちから、地元の著名人などからパーティーの招待状をいただくようになりました。2年間の滞在の間に私たちは、数え切れないほどのパーティーに出席しましたが、ガイアナに着いて初めて受けた招待であった、地元のある裕福なお宅でのパーティーが、私にとってもっとも強く思い出に残るイベントとなりました。

その招待状にはパーティーは午後9時から始めると書かれていました。私たちは即座に当然これは夕食後の飲み物とダンスだけのパーティーであると判断しました。そこで、私たちは夕食を6時半頃に済ませ、少しのんびりした後、9時少し前に家を出てパーティーに向かいました。9時ちょっと過ぎに着くくらいが適当であろうと思ったのです。しかしながら、私たちは自分たちが当然常識と思う事が他の社会でも常識であるとは限らないということをそこで思い知らされることになったのでした。

私たちがそのお宅に到着すると、その夜のパーティーのために雇われたらしいウエイターの一人が私たちを門で出迎えました。パーティーはそのお宅の庭で開かれていたのです。彼らは手入れの良く行き届いたその庭にテーブルを並べているところでした。そのテーブルの一つに着きながら、私たちはまだパーティーの会場作りが出来ていないことに気がつきました。人びとは大きなスピーカーを配置したり、グラスを箱から出してバーに並べたりしていました。ゲストで来ているのはまだ私たちだけ、ということは明らかでした。スタッフの一人が私たちにホストたち（パーティーの開催者）はまだ家の中で着替えをしている、と教えてくれました。私たちは座ったまま人びとが会場作りをするのを眺めながらじっと待ちました。到着してから約1時間が過ぎた頃、私たちは何か妙だ、と感じ始めました。『招待状を読み間違えたのだろうか？招待状には午後9時と書いてあったよな。』そしてやっと次のゲストが到着したのはそれからさらに30分経った頃でした。それからは次々とゲストが到着し、会場には途

端に活気が満ち始めました。ホストも出て来てゲストを迎えました。カリプソの音楽も流れ始め、飲み物が出され、ウエイターたちはゲストの間をオードブルの皿を持って廻り始めました。私たちも他のゲストたちと興味深い会話にひたり始めました。興味深い会話、カリプソの音楽、そしてラム酒に時はあつと言う間に流れて、気がつくともう夜中の12時を廻っていました。その日は木曜日だったので、翌朝は主人も仕事に行かねばならず、そろそろ家に帰って寝たほうが良いということになりました。私たちは、おいとまをする事を告げるため、ホストの姿を会場の中で探し始めました。大勢のゲストの中にホストを見つけ、楽しいパーティーであったとお礼を述べておいとましようとした時、そのホストの言葉に私たちは耳を疑いました。

「おや、まだ帰らなくてもいいではありませんか。これから夕食を出すところですから」

「夕食ですか？」

「ええ、あと2、3分で夕食が出されますから」

少々面食らって、私たちは

「もちろんですとも。夕食をいただいてからおいとましますよ」

と答えました。即座にショックから立ち直った私たちは、午前1時にカリブの料理を堪能することとなったのでした。私たちがやっと家に帰って来たのは午前3時頃でした。朝はあつと言う間にやって来て、主人はほんの2、3時間の睡眠を取っただけで出勤して行きました。その後、同じ様な間違いをもう一度繰り返した私たちは、ガイアナではパーティーに招待されたら少なくとも1時間は遅れて到着するものである事、そしてほとんどのパーティーでは夕食は夜中を過ぎてから出て来るものである事にやっと気づいたのでした。アメリカとは違い、週末ではなく平日にパーティーが開かれるのはガイアナでは当たり前で、しかもそのパーティーは夜明けまで続いたりするのです。老いも若きもラム酒を飲んでカリプソの音楽に乗って踊り明かすのです。でも私たちがガイアナの人びとに驚いたのはそういったパーティーそのものではありませんでした。私たちが一番驚いたのは、ガイアナで知り合ったほとんどの人がパーティーが大好きで始終夜更かしをしているにもかかわらず、パーティーの翌日に仕事に決して遅刻をしないことでした。今でも、ガイアナでの初めてのパーティーで恥をかった事を思い出すと、ガイアナの人々がどんなに働き者であったかも合わせて思い出す私たちです。

A letter from the U.S.A. (38) Caribbean Experience

Harumi N. STEPHENS

[January 17, 2004]

Until I married my husband more than twenty-one years ago in Tokyo, I had never lived outside of Japan. My husband, a Foreign Service officer with the US State Department, worked at the American Embassy in Tokyo. Shortly After we got married, we learned that his employer, the US State Department was sending us on a two-year assignment to Guyana in South America. While living in foreign country seemed very exciting to me at that time, I had no idea what to expect. Most of all, I had never heard of Guyana.

Guyana, a small country that is located on the northern coast of South America, shares its border with Venezuela, Suriname, and Brazil. Guyana was originally a Dutch colony that came under British control in the early 18th century. British Guiana became independent in 1966 and adopted the name Guyana. While the country is geographically a South American nation, it has more in common culturally with the small islands of the West Indies and Guyanese consider themselves Caribbean. Guyana's coast is barricaded with a sea wall and the ocean is not turquoise blue. Thus, unlike Jamaica, Barbados, or any of the other famous vacation spots in the Caribbean, Guyana had virtually no tourism. The country's economy was traditionally dominated by sugar cane cultivation. Guyana also has some natural resources such as bauxite, manganese, gold, diamonds, etc. Despite these rich resources, the country was described as "poor." In addition to information that was provided by the State Department, we tried to read about its culture and customs as much as possible. The last thing we wanted to do was to be arrogant Americans. However, nothing prepared us for our experience in this true Caribbean nation.

The country may be poor economically, but it is rich in culture. The abundance of tropical fruits and seafood made our life in Guyana almost heaven. Having no TV station, people were more tuned into their traditions and culture. Calypso, the traditional Caribbean beat was their first choice in music. From their sugar cane comes the best rum in the world. At any social gathering, whether it's a barbecue party, cocktail party or dinner party, calypso and Guyanese rum were always expected. During our two years in Guyana, we learned how Caribbean people have fun.

All our efforts to learn their culture as much as possible and to show our respect helped us build friendships with local people rather quickly. Soon after we settled into our new home in Georgetown, the capital of Guyana, we started to receive invitations to parties from noted locals. Among the countless parties we attended during the two years, the very first party that we were invited to by a well-to-do local family became one of our most memorable events in Guyana.

The invitation said that the party would start at 9:00 PM. We immediately thought that this would be an after dinner

party with drinks and dancing. We ate our dinner around 6:30 PM, relaxed a little bit, then headed for the party just before 9:00 PM. We thought that arriving just after 9:00 PM would be appropriate. However, we learned that what you may think is common sense may not be so common in a different culture. When we arrived, we were greeted at the gate by one of the waiters hired for the night. The party was taking place in their garden. They were setting up tables in the well-manicured garden. As we sat at one of the tables, we noticed that the place was not quite yet ready for the party. People were setting up huge speakers, taking glasses out of boxes to set up a bar. Clearly we were the first guests to arrive. One of the staff told us that the hosts were still inside the house getting dressed. We sat and waited, watching people setting up the place for the party.

We begun to feel strange when we noticed that one hour had passed since we arrived. "Did we read the invitation wrong? It said 9:00 PM didn't it?" Another half-hour had passed when the second guest arrived. After that, people started to show up one after another. The place was suddenly alive. The hosts came out to greet the guests. The calypso music was playing. The drinks were served. The waiters were moving among people offering hors d'oeuvres. We started to engage ourselves in interesting conversations with various people. The conversations, calypso music, and the rum made the time really fly. It was already after midnight. Since it was Thursday and my husband had to go to work the next morning, we decided that it was time to go home to get some sleep. We looked for our gracious hosts to say good night. When we found our hosts in the crowd and told them how much we enjoyed the party, what they said stunned us. "Oh, you can't leave, yet. We are about to serve dinner." "Dinner?" "Yes, dinner will be served in a few minutes." A bit taken aback, we told them, "Of course, we won't leave without having dinner." Recovering from the shock quickly, here we were enjoying a wonderful Caribbean meal at one o'clock in the morning.

We didn't arrive home till 3:00 AM. The morning came really fast. My husband went to work after having just a few hours sleep. After making yet, another mistake like that, we finally learned that in Guyana, you are supposed to arrive at least one hour late when you are invited and dinner is served after midnight at most parties. Unlike in the States, having parties on weekdays is very common in Guyana, and the parties almost always last till dawn. They drink rum and dance to the calypso music, young and old, till morning comes. However, that was not what amazed us most about Guyanese people. What was most amazing to us was that as much as the Guyanese people we met there loved to party and keep late hours, they were never late for work the next morning. Along with our embarrassing experience at the party in Guyana, we always remember how hard-working they were, too.

[2004年1月17日]

直至与现在的丈夫结婚，21年了，我从未在日本之处的地方生活过。当时，丈夫受美国国务省外交部派遣，在东京美国大使馆工作。结婚不久，国务省通知我们到南米一个叫圭亚纳的国家长驻2年。当时我对在外国生活感到兴奋，不可想象，会发生什么事呢？首先圭亚纳这个国家是我从未听说的。

圭亚纳是位于南美北岸的小国、国境与委内瑞拉、苏里兰、巴西相接。圭亚纳原是荷兰的殖民地、18世纪初被英国统治、当时名为Guiana，1966年取得独立，改名Guyana。地理上属南美，文化上与西印度群岛共同点很多，圭亚纳人自称是加勒比人。

圭亚纳的海岸线筑着堤坝、海水也不呈蔚蓝，所以与牙买加、巴之多斯岛等加勒比海有名观光地不同，可以说旅游业者几乎手不沾此。该国的主要产业是传统的甘蔗。圭亚纳还有锰、金、钻石等自然资源。虽然资源丰富，该国还是被称为穷国。国务省给我们提供了这些信息，为更多地了解该国的文化风俗、我们极力搜集资料，以免在外国被认为是傲慢的美国人。但是，对这个真正的可勒比海文化的国家，光靠阅读资料是很难理解的。

该国经济可能确是贫穷，但文化是很丰富的。而且有丰富的热带水果和海鲜、使我们在圭亚纳的生活宛如天堂。这里没有电视，人们都充分关注自己的传统和文化。人们最喜欢的是加勒比的传统音乐Calypso，用他们自己种植的甘蔗酿出世界最桂的兰姆酒，烧烤派对、鸡尾酒派对、晚餐会，凡是人们汇集的地方都少不了Calypso和圭亚纳的兰姆酒。在这里的2年中，我们知道了圭亚纳人的派对是何等欢快。

大概因为我们尊重努力学习圭亚纳文化的态度被认同了吧，当地人们很快就对我们表示友好。我们在首都乔治敦安顿下来不久，就收到当地名人的晚会邀请函。两年中我们参加过数不清的派对，但第一次参加当地一位富人的派对，是记忆最深的一次。

那邀请函上写着9点开始，我们当然认为是只提供饮料的派对。我们6点半吃了饭，休息一会儿，9点

钟前离开家前往，9时过一点到，为最合适吧？但后来才知道，我们认为是常识的东西，在别的地方不一定是常识。

我们达到时，为当晚派对而特别雇来的侍应生在门口迎接我们。派对在这家院子里举行，他们正在管理得很好的院子里排桌子。我们被引到一张桌子前，并且发现会场准备还未作好。人们正在装大喇叭，从箱子里取出玻璃杯摆放在桌子上。很明显来客仅有我们二人。工作人员告诉我们，主人们还在家里换衣服，我们看着人们布置会场，一直坐着等。过了一个多小时，我们觉得有点奇怪：“是不是看错邀请书啦？确实是写着9点的呀。”下一位客人到达是再过半小时后，然后客人陆续到来，会场活跃起来，主人也出来迎接客人了。Calypso音乐流淌，饮料送上来，侍应生端着冷盘在来客中穿梭。

我们也开始与其他客人交谈。有趣的谈话、Calypso的音乐，加上兰姆酒，不知不觉已到深夜12点。这天星期四，我先生第二天要上班，我们想该走了。我们在众多客人中找到主人告辞，称赞这是个快乐的派对，这时主人说的话使我们吃一惊，

「怎么？迟点走也行吧？马上要上晚餐了。」

「晚餐？」

「对，再过2、3分钟就送上来了。」

我们有点狼狈：「当然，我们吃了晚餐才走」。清晨1点，我们满意地品尝了晚餐，回到家已是早晨3点，先生只睡了2、3个小时就上班了。之后，我们又犯了一次同样的错误，这样才知道在圭亚纳参加聚会，至少要迟到一个小时，而且几乎所有聚会的晚餐都在深夜开始。与美国不同，在圭亚纳，不在周末，而在平日开派对是理所当然的，而且持续到天亮。老人、年轻人都喝着兰姆酒跳舞。

我们对圭亚纳人感到吃惊的不是这些派对，而是：我们认识的几乎所有圭亚纳人都喜欢派对，尽管玩现到夜深，但第二天上班决不迟到。至今每当我们想起在圭亚纳参加的第一个派对，总是同时想起勤劳的圭亚纳人。

[翻译：王菲]



青少年国際理解講座 西町インターナショナル・スクール ウィンターコンサート見学会
憧れの地へ (少し大げさですが...)

河合 美緒 (15 歳)

毎朝、私は登校する時に地下鉄や通学路で同じ年かそれより小さいくらいのインターナショナル・スクールの子たちを見かけます。彼、彼女らはそこにいて、やはり不思議な雰囲気を出している、割とミーハーな私と同級生らはなんとなく気をひかれながら学校へ行っています。そんな憧れのインターナショナル・スクールへ、私は抜け駆けして行ってきました。その時のことを書きたいと思います。

まず、何をしに行ったかという、「ウィンターコンサート」を聴きに行ったのですが、学校の中に入った時点で私はもう、目的を半分くらい遂げた気になっていました。学校周辺というのは制服が重荷となってあまり歩いたりしません。ただ通学路を歩くばかりです。ですから、いくら目的地が毎日通っている学校から徒歩 10 分くらいといっても、そこはまったく未知の世界なので、地図（協会の方が送ってくださったのですが）を片手に道をたどって歩き

ました。道の両脇に並ぶのは大使館やお屋敷の塀、急な坂を登ったところに広がる Y 字の分岐路、そこで迷わないように見る地図には日本語表記と併せて英語が書いてある・・・、とこのくらい書けば少しは伝わるでしょうか、ともかく校門の所に着く頃にはイッパイイッパイになっていました。さて、ようやく到着した憧れの地、本来おしゃべりな私ですが、しゃべる暇もなく辺りを見渡すばかりでした。そんな中、嬉しかったのは「かさじぞう」の音楽劇が観られた事です。英語（もしくは仏語、中国語等々）が似合いそうな子たちが口をそろえて歌っているのが「日本語」である、ということ、そのことが私にとっては妙に嬉しかったです。

すっごく肩も肘も張って気疲れしてしまい少しもったいなかったかな、と思うところもなくはないのですが、楽しいひと時でした。この喜びが少しでも伝われば幸いです。

MIA Youth International Understanding Series—Winter Concert at
Nishimachi International School (NIS)
A visit to the place I longed for (a slight exaggeration?)

Mio KAWAI (15)

Every morning when I go to school, I see boys and girls from Nishimachi International School on the subway and on the roads leading to their school. They look about the same age as I am or a little younger.

Just by being there, they produce a strange and unique atmosphere. So, my classmates and I, who are rather low-brow, pay attention to their attractive characteristics when we see them on our way to our school.

As I could finally visit NIS as I had longed to do, I want to write my impression of this occasion.

My major purpose in visiting NIS was to enjoy listening to the NIS Winter Concert. When I entered the NIS campus, I felt satisfied that half of my purpose was met.

Usually I don't walk around my school site because I somehow feel oppressed by the uniform. I just take a walk along the school road. Though my destination (NIS) is only about a 10-minute walk from the school I attend every day, it is an unknown world for me. So, I walked to NIS along the street shown on the map in my hand that MIA had kindly sent me.

On both sides of the street, there are embassies, walls of premises and a Y-shaped crossroad at the top of a steep slope; further guidance on the guide-plates around there is written in both Japanese and English in order to prevent people from losing their way. From the above information, I think you can imagine the circumstances and atmosphere around NIS. Anyway, when I was approaching the gate of the school, I saw many visitors gathered there. When I finally arrived at the place I had longed to visit, I looked around curiously, having no time to chat, though I am usually talkative.

What delighted me even more was that I could enjoy seeing a musical dramatization of "Kasa Jizou" or "Guardian deity of children" performed by boys and girls of NIS; children who look English, French, Chinese and so on were singing in Japanese which made me feel strangely happy.

Unfortunately, I felt emotionally tired and my shoulders and elbows felt strained. Anyway I had a very pleasant time there. I am happy if you understand my pleasure even a little.

[Translated by: Naoteru NARITA]

每天早晨，是在我上学的路上，地铁里总是能碰到一些象我一样大的或小一点的国际学校的学生们，碰到他，她们总有一点不可思议的感觉出现，有些虚荣心的我，总有点不同的气氛走去学校。在那里的国际学校真是有点不可思议的地方。在此把当时的想法写一下。

首先，去那里干什么去呢：去那里听「冬季音乐会」的音乐。当我一走进学校的门，就觉的自己的目的已有一半达到了。当我走去学校的路上时，有点不自然的感觉，特别是走到学校的附进时，感觉到自己的校服很沉重，连路也走不动了，这是唯一上学的道路，尽管它离自己的学校才相差10分钟左右。就差这一点总觉得不可思议，它是一个未知的别一个世界。一

手拿着地图（是协会寄给我的）一边走着，道路两旁并列着大使馆和住宅的围墙，走上斜坡进入三叉口路……终于来到了学校门口，不断的喘气，总算到了一直想往的不可思议的地方来了。本来很爱说话的我，连说话的时间都没有边走边看。在这期中，使我很高兴地看到了「伞地藏」的音乐剧。用英语（如果是法语、中国语等等）很适合这些孩子们，但合唱的歌是用「日本語」，使我特别兴奋。

很紧张的我，累的我连肩都合不起来了。想一想真是太快乐。这样高兴的场面。如能授给大家也高兴一下，真是我的一大幸福。

[翻译：石井 通惠]



港区国際交流協会活動紹介～ウォーキング

2003年、恒例の交流ハイキングは、気持ちよくちょっぴり疲れた柴又ウォーキングでした。

JR 高砂駅集合。その場で班分けし、待ち時間の間にみんな仲間になり、乗り換えもスムーズにでき、京成江戸川駅へ。江戸川の河川敷にある小岩井菖蒲園（花菖蒲100種、9000株）は、盛りが過ぎたけれども美しい大輪の花が咲き乱れ、時間をたっぷりとったので、参加者たちはあちらこちらにたむろして、『花に負けじ』と話に花を咲かせていました。快晴に恵まれ、のんびりしたひとときでした。

電線やビルに邪魔されることのない青い大きな空と太陽、初夏の風の中、芝と川、それに土手とグラウンドしかない自然の中、子どもたちの歓声に鳥のさえずりを聴きながら、日光を遮るものがない中で唯一の日陰である北総線のガード下を目指して、まっすぐ60分のウォーキングです。駆ける人、ふざけあう人、話に夢中になる人、さまざまで、たっぷり時間をかけて、のんびり太陽に干されたどり着いたガード下の日陰でのお弁当とお昼寝！キモチイイ！！

半日かけた自然と人と、そして人と人の触れ合いの後はお勉強？20分ほど歩いて土手を越え、山本亭のお茶席へ。季節の花をかたどった美しい和菓子に歓声を上げ、和洋折衷の珍しい建物の中、日本庭

園を眺めながらお抹茶をいただき、大正浪漫の香り漂う空間で、時間が止まったようなひとときを過ごしました。

柴又帝釈天では、寺の壁面いっぱいの仏さまの木彫りを鑑賞し、日本庭園を取り囲む渡り廊下を回って山門で解散。後は自由に、駅までまっすぐ続く門前の参道の賑わいを、『これぞ日本の下町、現在に残る庶民の伝統』とばかり、右や左へ試食をしながら、お団子や佃煮をお土産に、いそいそと家路につきました。

お天気に恵まれ、すてきな人たちとの出会いで発見した感受性の違いを、おしゃべりと共に楽しめた一日でした。気持ちよく、ちょっぴり疲れた一日でした。

またみんなでどこかに行きましょう。お目にかかる日を楽しみにしています。行きたい所、みんなでしたいことをリクエストしてください。

（5月22日（土）にハイキングを計画しています。詳細は港区国際交流協会ホームページ（<http://www.minato-intl-assn.gr.jp>）をご覧ください。）

平成15年度国際交流柴又ウォーキング
実行委員長 加藤 多美子

港区国際交流協会「交流サロン」のご案内

参加者が自由におしゃべりする場として、隔月第三金曜日の夜、「交流サロン」を開いています。200円程度のスナック菓子をご持参の上、ご参加ください。詳細はお問い合わせ下さい。Tel. 03-3578-3530

6月18日（金）午後6時30分～8時30分
港区役所9階911／912会議室

MIA Friendship Lounge – Let's talk over a cup of tea!

We welcome your attendance at our MIA Friendship Lounge. The Friendship Lounge is not a lecture or a classroom. Our main purpose is to enjoy chatting, exchanging views and making friends over a cup of coffee or tea. The 3rd Friday of every 2nd month is your time to participate in mutual understanding and communication between Japanese and non-Japanese residents. Feel free to visit the space and please bring a snack worth 200 yen with you. For details, please call MIA at: 03-3578-3530.

June 18 (Fri.), 18:30-20:30
Minato City Hall 9th floor, #911-912

交流社交室情報

为了促进，外国人和日本人的交流，隔月第三个星期五晚上，以下时间举办交流社交室，届时请邀请朋友一起参加。参加者请携带200日元左右的小吃参加。详细的情况请打电话询问：Tel. 03-3578-3530

6月18日（星期五）下午6:30-8:30 于
港区区役所9层911会议室 / 912会议室

Presentation of One of MIA's Activities: "Walking Tour"

We visited the Shiba-mata area in Katsushika-ku as the International Exchange Walking Tour for fiscal 2003 on a fine day in early summer last year. I felt a little tired but it was pleasant.

We, the participants, gathered at Takasago Station of the JR Line and were soon divided into several groups. In a short time, we started talking with each other and became friends. Without any difficulty in transferring trains, we arrived at Edogawa Station on the Keisei Line. We got off the train and then visited Koiwai Iris Garden on the riverbed of the Edogawa River. There are 100 different kinds and about 9,000 iris plants in the Garden. The general blooming of the flowers had already passed, but some still remained in full bloom and boasted their beauty with large flowers. We had much time to stay there so all the participants sat with their own groups here and there and had lively conversations, which seemed a counterpoint to the beauty of the flowers. We were blessed with fine weather and I felt it was a truly relaxing time.

We could see the bright blue sky and the sun without intrusion by electric wires or tall buildings. In a gentle breeze of early summer, we could only see the turf and the water of the river. We could hear the cheerful voices of children and the music of the little birds in the natural environment with only the riverbank and the earth. We walked straight ahead for 60 minutes aiming for the area below the railroad bridge of the Hokuso Line, the only place we could find shade for lunch. Some participants ran about, others joked among themselves and some others were engrossed in conversation. We finally arrived at the railroad bridge after spending much time in the sun. We had lunch and took a nap in the shade of the railroad bridge. How pleasant it was!

After enjoying the natural beauty and chatting merrily with the company for about half a day, we walked along the bank of the river for 20 minutes more and went to a tea-ceremony house called Yamamoto-tei.

While admiring the Japanese garden, we raised our voices in joy at the beautiful Japanese cakes that were made to imitate flowers of the season and drank powdered green tea in an unusual type of house which combined Western and Japanese styles of architecture. Feeling as if time had stopped, we shared the time together in the romantic mood of the Taisho Era.

At Shiba-mata Taishaku-ten, we admired the Buddhist image carved in wood spreading over the face of the whole wall of the temple. (*Shiba-mata Taishaku-ten was established in 1629 by the Buddhist priest, Nichiren Shonin. It is called Taishaku-ten since the wooden sculpture carved by Nichiren Shonin himself is the principal image of the temple.*) Passing through the connecting corridor surrounding the Japanese garden, we were dismissed at the main gate of the temple. Then we enjoyed the shops on both sides of the street leading directly to the station, feeling as if this were a real traditional shopping, entertainment and residential district of Japan where the old traditions still remained, and tasted samples of dumplings (Dango) and foods boiled down in soy sauce (tsukudani).

Then we bought some items as gifts for our families and went home in a joyful mood. The weather was fine; I discovered differences in sensibility expressed by each person and truly enjoyed meeting and talking with nice people.

Let's go somewhere interesting together one day this year, too! I am looking forward to seeing you again.

Please let us know where you want to go or what you want to do.

This year we are planning to go hiking on May 22 (Sat). Please refer to our home page. The address is: <http://www.minato-intl-assn.gr.jp>

Tamiko KATO
Executive Committee Chairperson
International Exchange Shiba-mata Walking Tour
[Translated by: Yoshiko TSUKUDA]
*words in italics were added by the translator

港区国际交流协会活动的介绍 — 散步道

2003年，惯例的交流旅行，是略带疲惫但心情舒畅的‘柴又散步道’，首先在JR高砂站集合，然后分成几个小组，在等待的时间里，通过愉快地谈话和寒暄，大家很快就熟悉起来了，顺利地换乘电车，来到了京成线江户川站。

在江户川的河川敷里，有一个小岩井菖蒲园（玉蝉花100种，9000棵），虽然已过了盛开的时节，但是五彩缤纷的花朵依然绚丽多彩，大家三五成群，左盼右顾，悠闲自得地享受着赏花的喜悦。

在没有电线杆和楼房等障碍物遮挡的广阔、蔚蓝的天空下，明媚的阳光、初夏的和风，河流与青草、堤坝和运动场构成了一幅大自然的美丽画卷，大家听着孩子们的欢笑声和小鸟的鸣叫声，朝着目标——北总铁路线的桥梁下，漫步60分钟，当中有跑步的、戏耍的、说笑的各种各样，来到这里唯一可以遮挡骄阳的桥梁下，打开盒饭，进而享用野餐，进而又做短暂的午睡，好舒服啊……！

经过半日的人与自然接触和人与人的交往之后，步行20分钟，翻过了堤坝，大家走向山本亭，那里有饮茶的地方，在品尝模仿这个季节盛开的花朵的形状制作的和式点心的时候，不时地扬起阵阵欢快的笑声。

在和、洋结合的珍奇建筑物里，一边眺望着日式庭院，一边喝着抹茶，在漂浮着大正时代浪漫气息的空间里，时光似乎已经一时停止了。

来到了「柴又蒂释天」，欣赏了寺庙墙壁上的很多雕刻的木佛，经过日本庭园的回廊，在山门门前解散，然后自由活动。从山门到车站笔直的参道上，充满繁荣、热闹的景象「这就是日本下町，庶民所保留的传统」，大家左吃、右尝，还买了许多江米团子，咸烹海味等土特产，欢欣雀跃地踏上了归程。

天公作美，在这个宜人的天气里，大家通过美好的相聚，带着不同的感受与发现，伴随着轻盈的笑语，度过了愉快的一天，虽然感到有一点点的疲惫，可是每个人的心情却感到十分地舒畅。

我们下一次还可以到什么地方去哪！请大家把各自想去的地方和希望从事的事情推荐出来。

5月22日（星期六），已经计划了下一次的‘散步道’，详情请查阅港区国际交流协会的网页 <http://www.minato-intl-assn.gr.jp>

实行委员长 加藤多美子
平成15年度国际交流柴又散步道
[翻译：张晓鸿]

編集後記

ひとつの事業が何年も続くと、その存在意義があいまいになってくる。携わる者も新鮮な情熱に突き動かされる機会が減り、ルーティン化した作業に甘んじてしまう恐れもでてきます。「サウス・ウィンド」は10年以上続き、すでに42号を発行する季刊誌となった。これが紙上の意見交換を目指していることは、これまで、何度も強調してきました。けれども、自分が書こうとすることが意見を述べる対象として相応しいか、それが、他の読者に良い刺激を与えられるか、と悩んで筆を執りかねている人はいませんか？

時折、編集部のほうからテーマを提示してご意見を募ることにしたのは、こうしたジレンマを打破したいとの意図です。設定するテーマは、日常、誰もが考えたことがありそうなものに傾いてしまいます。

今号では思いがけず恥をかいた経験談を特集しました。異国の伝統や文化を十分に理解する心準備もなく祭りに臨んだとき、テクノロジーの急速な発展に当惑したとき、自分が誇るべき祖国の文化を伝えられないことに気づいたとき、など、恥と感じる対象はさまざまです。みなさまはどんなことに思わず赤面してしまうでしょうか？

次号では、子育てをテーマにします。子どもたちを囲む環境、大人の責任、教育が支える世界の将来、など、テーマに沿ったご意見をお寄せください。他に差し迫った問題やご意見を提起くださるのももちろん歓迎します。

編集長 中野 義子

Post-script

When one project lasts many years, its existing significance may become more and more vague. Those who are engaged in it have less chance to recall their fresh original enthusiasm and resign themselves to routine works.

“South Wind” has been published for more than ten years and this is its 42nd issue. I have often emphasized that the aim of this quarterly is to offer the space for readers to exchange their opinions and ideas in written form. Some may be hesitant to write, as they are not sure if their topic would be of interest to the public or is worthy of discussion.

It was in order to break through this dilemma that “South Wind” started to offer a specific theme from time to time and call for the contribution of essays about it. The offered themes have been rather general so that anyone could easily think about it.

The present issue features embarrassing personal moments. The moments vary: when one assists at a festivity without having enough knowledge to appreciate the pride of local people in their tradition and culture; when one feels uneasy with the speed of technological development; when one cannot respond with confidence to foreigners’ curiosity about the cultural assets of his own country; etc., etc. The objects causing embarrassment also vary according to the person. When are you embarrassed, yourself?

In the next issue, we would like to feature “child rearing.” Children’s surroundings, adults’ responsibility for children, educational visions for the future, and other opinions concerning child rearing are most welcome. In addition, we always look forward to receiving contributions about immediate concerns or opinions.

Editor in Chief
Yoshiko NAKANO

编辑后记

当一份事业持续多年以后，它现有的意义也许会越来越模糊。而那些参与它的人们则少有当初的那份热情，并逐渐将它当作一种按部就班的工作。“南风”已被出版了为期十年之多，而这是它的第42期。我经常强调，出这份季刊的目的是提供空间，使广大的读者有机会以书面的形式交换他们的见解和想法。一些作者也许会犹豫，因为他们无法预见他们所取的题材是否会引起读者的兴趣，或是否有被讨论的价值。

为了打破这种困境，“南风”开始时常提供一些专门的主题并征集各类于此相关的杂文。被提供的一般是比较广泛的题材，以便任何人都能容易地对此进行思考。

当前的特色问题为：令人困窘的个人片刻。这种片刻变化多样：譬如，当你协助一个庆典时，因对所在地的传统和文化没有足够的认识而无法对此进行赞赏；当你对日新月异的新兴技术无法适应时；当你对外国人对本国的文化财产所表现出的好奇心却无所适从时；等，等。导致窘态的原因也是因人而异。那您自己呢，何时也曾困窘过？

在下一期里，我们想以“抚养儿童”为主题。儿童生长的环境、成人对孩子所应承担的责任，教育事业的远景，以及其它关于抚养儿童的观点都将受到欢迎。另外，我们期望能够得到您更多的关心和肯的意见。

主编 中野義子
[翻译：渐乌]



投稿募集

港区国際交流協会翻訳委員会では、紙上を意見発表／交換、討論の場として、多様性を認識し、一層深い理解と友好を互いに深め合うことを目的として「South Wind」を発行しています。皆さまの投稿をお待ちしております。なお、掲載についてはSW編集部で検討させていただきます。

① South Wind に掲載された記事は港区国際交流協会の website に掲載されることもあります。

② South Wind に掲載された記事についての著作権は港区国際交流協会に帰属します。

投稿方法： 原稿は原則として日・英・中のいずれかを使用してください。投稿原稿の字数は 800 字以内をお願いします。

宛先： 105-8511 港区芝公園 1-5-25 港区役所 8 階
港区国際交流協会事務局 South Wind 編集部
Fax: (03) 3578-3537 E-mail: s-wind@minato-intl-assn.gr.jp

Your Contribution is Welcome

By exchanging opinions with other people, who are from different cultures or backgrounds, in “South Wind,” we hope we are able to recognize the diversity of our society and deepen our mutual understanding and friendship with each other. Please take full advantage of this opportunity to express your opinions! The Editorial Committee reserves the right accept, reject and/or edit articles submitted for publication.

1. Minato International Association reserves the right to publish all articles submitted for publication in South Wind on their website (<http://www.minato-intl-assn.gr.jp>).
2. Copyrights on all articles submitted for publication in South Wind become the sole property of Minato International Association.

How to contribute: Please submit your essay written in Japanese, English or Chinese; essays should be between 800 and 1,200 words.

Send contributions to: South Wind Editorial Room; Minato International Association
Minato City Hall 8th Floor, 1-5-25 Shibakoen; Minato-ku, Tokyo 105-8511
Fax: 03-3578-3537 E-mail: s-wind@minato-intl-assn.gr.jp

募稿

目前港区国際交流協会翻訳委員会出版名叫“South Wind”の小報。基于不同国家之文化风俗等，互相提出各种各样的意见，把该报当看发表所交换所想讨论各个意见之场所，进一步加深相互理解加强交流为其目的。欢迎各位积极投稿。将由编辑部研究决定是否采用。

① South Wind 里登载的文章也可能在港区国際交流協会の website 里发表。

② South Wind 里登载的文章的著版权是归港区国際交流協会所有。

投稿方法： 原稿原文请用下面的语言：日语、英语、中文，投稿原稿的字在 800 字以内，请多关照。

收件地址： 105-8511 港区芝公園 1-5-25 港区区役所 8 楼
港区国際交流協会“South Wind”编辑部